

はしがき

大学にスケールを与えるのは理系、品格を与えるのは文系といえましょう。本紀要『国際文化』は、この意味で、公立小松大学の品格を体現するツールの一つと位置づけられようかと思えます。

今号の紀要は、「岩田 礼 教授・盛田 清秀 教授・サンダーズ ロバート 教授退職記念号」と銘打たれています。岩田教授、盛田教授、サンダーズ教授は、本学創業以来の初代教授として、本学そして国際文化交流学部のおゆみをとともにあゆんで来られました。三先生のおゆみは、開学年度に創刊されました本紀要のおゆみでもあります。今特集号は、本学の完成年度に上梓される号にふさわしい企画であろうかと存じます。

岩田先生とサンダーズ先生のご専門は中国語学。両先生は、劉 乃華 教授とともに、国際文化交流学部の教育上の特色の一つである、二必修外国語、すなわち英語と中国語の共修得という目的を、見事に達成されました。一昨年のGW、「きずな合宿」の会場に向かうバスの中で、入学したばかりの国際文化交流学部一年生が中国語での点呼にしっかり応える様子には驚いたものです。初年度来、広域で開催される中国語コンテストで一等賞受賞者が本学から毎年度輩出されたことも成果のあらわれでしょう。サンダーズ先生は、アルファベット順中英辞書 *ABC Chinese-English COMPREHENSIVE DICTIONARY* (University of Hawai'i Press, 2003) を世界ではじめて編集されたことで有名です。2018年9月、岩田先生が主催された *Komatsu Round-Table Conference on Geo-linguistics* は、記念すべきことに、本学で開催された最初の国際会議となりました。

盛田先生は、誰もが知る農業経済学の大家です。盛田先生が編集委員長として出版された『農業経済学事典』（丸善出版、令和元年）は、盛田農業経済学の集大成であり、本学国際文化交流学部から発信された研究成果中の金字塔でありましょう。同事典には、「グリーンツーリズム」の命名者、本学・宮崎 猛 教授の名も認められます。

管理・運営面では、岩田先生は、開学準備期にはPO (principal organizer) として、開学後は初代学部長・学科長として、国際文化交流学部の開設および設置計画の実現に貢献されました。盛田先生は、学内にあっては教育研究審議会メンバーとして、また、国や自治体の諸委員会委員(長)として、本学の教学ならびに社会連携活動で重要な役割をはたされました。

私は日頃、国際文化交流学部と同じ中央キャンパスに勤務しております。顧みますと、創業以来のさまざまな局面が三先生のお音容とともに耳目に甦ります。ニュージーランドへの最初の学生引率を成功裡に了えられた折のサンダーズ教授の喜色満面の表情、COVID-19 というパンデミックに遭遇する困難にあって、台湾への学生派遣と滞在延長そして引き上げを無事はたされた際の岩田教授の安堵の声、上梓されたばかりの『農業経済学事典』を手に役員執務室に入ってこられた折の盛田教授の意気昂然の歩み……。難儀しましたのは、COVID-19 対策でした。中央キャン

パスは狭く、「三密」を避けようとする、種々困難がありました。理事長、学長、理事・副学長も相部屋で我慢しておりますが、中央キャンパスではたらく職員、まなぶ学生にはずいぶん苦勞をかけたと思います。ご退職までにはまだ少し月日がありますが、岩田教授、盛田教授、サンダース教授には、ご在職中のご尽力、ご貢献に深甚の敬意と謝意を表しますとともに、いつまでもご壮健で後進をご高導くださいますようお願い申し上げる次第です。2024年には中央キャンパスは約1.5倍の広さになり、現在一つしかない大講義室は三つにふえる予定です。三先生には、ぜひ新中央キャンパスもお訪ねいただきたいと思います。

公立小松大学
学長 山 本 博